

海、山、川、まち みんなで磨く 元気わかやま市

和歌山市長

大橋 建一



【現状】

金融危機後、世界経済は、各国の景気刺激策と中国をはじめとした新興国の需要に支えられ、勢いを取り戻しつつあるものの、日本経済は、輸出の緩やかな増加により、最悪期は脱しつつあるものの、先日発表された4～6月期の実質GDPの成長率が年率0.4%と1～3月期より大幅に縮小したことに加えて、円高が急激に進行するなど、その先行きはいまだに不安定なものとなっており、失業率も依然高水準で推移しています。

また、昨年、自民党から民主党へと政権が移り、民主党により地域主権改革が進められています。従前の国・県・市の役割分担を見直し、新たな役割分担に基づく権限移譲が求められています。

そして、今年7月11日に行われた参議院議員選挙では、与党が過半数に届かなかつたため、再び「ねじれ国会」となり、これまで以上に政府の方針が揺れ動く場面も予想されるなど、地方への影響が出てくると危惧されています。

このような厳しい経済、政治状況ですが、その影響を最小限にとどめ、未来に向けて和歌山市が持続的に発展していくためには、まず、堅実な市政運営に努め、市政の安定を図ることが重要であり、併せて、住民の皆さんと行政が力を合わせ発展と活性化を図る施策をバランスよく展開していくことが重要であると考えます。

【安定と発展】

平成14年8月に和歌山市長に就任して以来、市政の信頼回復と傾いた財政の建て直しを図るため、財政状況の公開に努め、職員には人員削減と賃金カットを、住民の皆さんには下水道料金や都市計画税などの負担増をお願いし、地道に財政の健全化に努めてきました。そのことにより、平成20年度決算においては、健全化判断比率等が全て基準を下回ることができ、さらに平成21年度決算においても、前年度より改善され、財政立ち直りの兆しが見えるところまでこぎ着けたところです。

また、和歌山市の発展と活性化のために、全国の主要都市間を結ぶ広域幹線道路の機能強化として、近畿自動車道紀勢線に和歌山北インターチェンジを新たに設置するとともに、土地開発公社が保有していた未利用地である直川用地を企業誘致用地として活用するなど、財政の健全化と産業の活性化及び基盤整備を複合的に展開し、また、市内企業においても、製鉄所の新たな設備投資と増産、大規模空き店舗の再生、廃線を危惧された鉄道線の存続など、行政・企業・住民が協力し、地域の活性化に努めています。

今後も引き続き、安定した行政運営と活性化のために、行政と住民がともに、知恵と工夫を凝らし、「最少の経費で最大の効果」が得られるよう努めていきたいと考えています。

【3つの磨き、9つの充実】

和歌山市は、面積210.2平方キロメートル、人口約36万9千人の中核市で、県都として人口及び都市機能が集積した利便性の高い都市であるとともに、三方を山に囲まれ、市の中央を流れる紀の川、和歌川河口干潟や瀬戸内海国立公園に指定されている海岸部、また市街地周辺部に広がる田園などの豊かな自然に恵まれた環境と万葉の時代から連なる歴史文化を兼ね備えた素晴らしいまちです。

大都市と比べますと、都市施設の充実による利便性や情報入手の即時性などの点で十分ではないものの、あふれる陽光の中で、人々が交流し、支えあい、安心し、いきいきと元気に暮らせる環境を住民の皆さんが享受できることこそが、和歌山市の魅力であり、強みであると考えています。

和歌山市の将来都市像「海、山、川、まち みんなで磨く元気わかやま市」は、誰もが「住んで良かった」と思えるまちづくりをめざし、みんなの知恵と力を結集して「ふるさと和歌山市」の魅力磨き上げていきたいというもので、私はこれからの市政運営にあたり、「市民力」₁、「基盤力」₂、「観光力」₃の3つの力を磨き上げていきたいと考えています。

「市民力」につきましては、コミュニティーの充実、市民の健康環境の充実、総合的な子育て環境の充実、「基盤力」につきましては、メリハリのある都市づくりの充実、道路・公共交通網の充実、総合防災体制の充実、そして「観光力」では史跡和歌山城観光の充実、海を生かした観光ソフトの充実、美味しい和歌山市イメージの充実、これら9つの「充実」に努めていきたいと考えています。

【将来に希望が持てるまち】

少子高齢化が進み、首都圏など一部地域を除いて全国的に人口減少が続いている時代に、地方都市が独自のカラーを持って輝きを増すためには、「市民総がかりで街の活力を支えていく」という思いの結集が不可欠です。

市民一人一人がまちに希望を持てなくなると、

まちは一層寂れていくこととなります。逆に、未来に向かって希望が持てる形が見えてくるとなれば、市民の皆さんに「和歌山も活気が出てきた。よし、私も頑張ろう」という気を起していただくきっかけになります。

最近で言えば、和歌山北インターチェンジの開通と、直川用地への10企業の立地、「さんさんセンター紀の川」という保健所、コミュニティセンター、サービスセンターの複合施設建設が、和歌山市東北部在住の皆さんに「この地域も一気に良くなる」という大きな希望を持っていただくことにつながっています。市北部の民間による住宅開発も、新小学校と新駅建設、周辺の道路整備と相まって、住民の大きな希望を生み出しているように感じます。少し前には廃線の危機からよみがえった真志川線が沿線住民の元気を生み出す大きな力になりました。この10年ほど、「建設」とりわけ「ハコもの」と言う行政の無駄遣いのシンボルのようになってきましたが、「ハコもの」や道路は、恩恵を受ける住民にとっては希望のシンボルなのです。

幸い、これから「紀の国和歌山国体」までの5年間は、つつじが丘に市が建設する国体仕様のテニスコートはじめ、県の手でも多数のスポーツ施設が更新されます。こうしたことがきっかけとなって、市民が「和歌山もまた元気を取り戻してきた。うかうかしてはいられない」と思って、それぞれ市民活動やグループ活動で行政と協働していただけるようになれば、まちは輝きを取り戻し、良い方向に連鎖が広がっていくのではないのでしょうか。

もちろん、若い人たちに頑張ってもらいたいためには、例えば子育て環境など、市民生活の基礎的な条件を整えることが必要ですし、高齢の方たちが元気に活動していただくためには、健康面でのサポートが不可欠です。「3つの磨き」のトップに「市民力を磨く」を掲げたのは、健康・福祉・子育てなど安心安全の仕組みを構築することで市民の底力をパワーアップし、市民の底力でまちの活力をアップしていきたいという思いがあるからです。